

「主が共におられた！」 ～信頼関係を大切に～

創世記39：1～4、19～23

あるテレビ番組で「一緒に仕事をした人は実は社長だった」という内容のものを放送していました。社長とは知らずに一緒に仕事をしてきた人たちは「まさか社長と一緒に働いたなんて」と驚いていました。これと同じようなことが私たちにも起きています。神さまは毎日私たちと一緒に、そばにいます。そして私たちの問題を見つけては私たちと一緒にそれを解決してくれています。でも私たちはそのことを忘れてしまいます。創世記39:1～4、19～23を読みましょう。この箇所は、神さまがずっとヨセフと共にいたと言っています。「主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。(39:2・3)」とあります。私たちは何をしても全てうまくいっているのでしょうか？神さまと一緒にいると、自分の行動や経済面だけではなく、人間関係も祝福されるし、私たちのやることは全て祝福されるし、私たちの言動や態度から周囲の人たちが癒されて良い方向へと変えられていくのです。水の中にある石とスポンジを想像してみてください。石は密度が高いので硬くて表面だけがぬれて中まで水が染みこんでいません。しかしスポンジは柔らかく水が中まで染みこみます。これは私たちの生活にも当てはまります。神さまは水のように私たちの周りにいてくれます。しかし私たちが心に鎧を着込んで石のように硬くなっていると、いくら神さまが恵みを流してくれても、それを吸収することができないのです。スポンジのように神さまの中にすっぽり入って私たち全体に神さまを染みこませていけば、搾った時…つまり私たちが行動したり発言したり何かした時に、神さまがあふれ出るのです。しかし今日教会では「自己愛性信仰障害」があるそうです。「あるがままの自分を愛してくれる信仰」で、それをしてもらえないとキレると言うことが起こっているそうです。どうしてこうなるかというと、その人たちが先ほどの外側は神さまで包まれています、内側が石で硬くて干からびた柔軟性がない水の中の石になっているからです。石が人に当たったらどうなりますか？人は血だらけになってケガをします。この干からびた人を助けようとしても、私たちが石のままです。その人に関わる(当たる)と、その人はケガをしてしまいます。このような人を傷つけてしまった経験はないですか？それは私たちが石だからです。神さまは、私たちにスポンジのように接して下さり、いつも私たちを恵みで満たそうとしてくれます。それなのに、私たちは人生のうちのたった1%ほどの失敗や辛く悲しい経験を悪魔に利用されて「いつも愛してくれている神さま」を「誰にも愛されない」に長年かけて騙してきたのです。ダビデとモーセを思い出してください。2人とも大きな失敗を犯してしまいました。しかし神さまに悔い改めて素直にごめんなさいをしています。2人ともいつも神さまがそばにいたことを覚えていました。ですから**①神様が共にいることを忘れるな!**です。詩篇51篇を見てください。この祈りがダビデ・モーセの人生でした。私たちは神さまが私たちを愛してくださったことは知っています。しかし常に私たちと一緒に生活し、語りかけてくれていること、感情的になったり嘘をついたりして神様に罪を犯している時も常に一緒にいることは知らないのです。だから私たちは平気で神さまの事を忘れてしまうのです。そして石になってしまうのです。神さまがいなくて自分を守る方法は硬い殻を自分の周りに作って強くするしかないからです。ダビデの詩篇23篇の祈りは「自分を守る硬い殻はいらぬ」と言っているのです。なぜこのように祈れたかと言うと、ダビデは神さまがいつも共にいることを良く知っていたからです。だからその共にいる神さまに罪を犯した時は自分を擁護することなく「神さま！私から離れないでください!!神さまのいない人生はあり得ない！」と神さまが共にいることをよく分かって祈ったのです。今まで、怒り・悲しみ・羞恥心・劣等感などの感情についてメッセージがありましたが、これらは、私たちと神さまとの関係を悪い方向へ持っていく問題だからです。これらは神さまが私たちを良くしようとする働きを妨害し私たちを神さまから離します。いつも共にいる神さまから私たちが離れるようにするのです。だから感情を制御して神さまが共にいることを忘れないようにしましょう。そして**②信頼を壊すものに勝利!**しましょう。感情的になって神さまから離れたあと、自ら神さまの懐から出ていったのに「どうせ私は1人」と言っていないですか？神さまは放蕩息子の父のように私たちを迎え包んでくれています。哀歌3:2～9でエレミヤは自分が石にならない、信頼を壊されない手段をとっていました。自分の悲しみ、不満を他人にぶついたり、人のせいにしないで、全て素直に神さまに委ねていたのです。エレミヤはスポンジのように悲しみ・不満で干からびた自分を、全身を包む水のような神さまに素直に寄り頼んで満たされたのです。エレミヤは哀歌5章で回復します。エレミヤは本当は神さまにではなく、神に従わない民に怒っていました。でもそれを神さまに向けて全てデトックスして神さまに全てを委ねたからです。人に感情をぶつけて信頼を壊すのではなく、すぐそばにいた神さまに全てを告白して信頼を壊すものに勝利していきましょう。信頼するもの同士は共にいます。出エジプト17章11節～16節です。イスラエル軍がアマレク軍と戦争をした時、勝利の鍵は献身的なモーセの両手を上げたとりなし祈りにありました。モーセが両手を上げて祈る時イスラエルは優勢になり、やがて手が重くなり、下りる時にはアマレクが優勢になったのです。そこでとりなし祈りの威力を知ったアロンとフルはモーセを石に座らせ左右から両手を支え、モーセは夕暮れまで両手を上げ続けることができ、このとりなし祈りの力で御使いの軍隊も加勢し、イスラエルはアマレクを制覇して勝利することができたのです。時には1人で祈ることが必要な時があるでしょう。その時も神さまとは一緒にいてください。**③1人になるな**です。マタイ18:18～20を見てください。神さまは「わたしもその中にいる」と言っています。2人3人集まって初めて神さまは其中で働かれるのです。だから悪魔は私たちを1人にさせようとします。又一の群れを襲い、1匹を集中攻撃して群れから孤立させ、それでもまだ何とか逃げ切ろうと頑張っている又一をしつこく追いかけて回し、最後には逃げるのを諦めさせるハイエナのように悪魔は私たちに働きかけてきます。それは、私たちが1人になると神さまの働きができなくなるからです。神さまがいないと自分で自分を守らないといけなくなるので、鎧を着込んで石のように硬くなってしまい、神さまの恵みが注がれなくなってしまいます。神さまはその硬さを私たちから取り除こうとされています。だから、イエスさまはいつも、私たちを包み込み中まで染みこんでくる水のようにそばにいてくださることを忘れないでください。(要約者：行司 佳世)